

# 対人援助学 & 心理学の縦横無尽 (24)

## 文化と記号と心理学

Jaan Valsiner 先生、2018 年 5 月の滞在記

サトウタツヤ (立命館大学総合心理学部)

この「対人援助学&心理学の縦横無尽」はイロイロなことを書き散らしているが、今回は、2018 年度立命館大学客員教授として来日した Jaan Valsiner (ヤーン・ヴァルシナー; デンマーク・オールボー大学教授) 先生の訪日・滞在記を簡単に書いてみたい。「対人援助学&心理学の縦横無尽」における拙論をひもといてみると、「対人援助学&心理学の縦横無尽 (3)」において「アーサー・フランク先生、三度目の来日 (滞在記)」という回があり、今読んでみるとそれなりに懐かしい。今回もそれにならって滞在記を記してみたい。

2018 年 5 月 6 日

ヴァルシナー先生 (以下では、主としてファーストネームのヤーンと記述) 関西空港に到着。大学院生つっちーと総合心理学部サトゼミ 3 回生のり君がお出迎えに行ってくれたのでこちらとしては安心であった。



ヤーンからは「THANK YOU for the warm welcome! I always return to Japan as to home..」というメッセージが寄せられた。以下では、5 月 7 日から 13 日まで毎日行われたヤーンの講義や講演について、そのスライドを何枚か抜粋しながら振り返っていく。

5 月 7 日 (月)

3 限の文化心理学にて特別スピーチ。タイトルは「INVITATION TO INNOVATION イノベーションへの招待」。講義は多岐にわたったが、ヴァルシナー流の文化心理学のエッセンスを語ってくれた。たとえば、以下の左側のスライドを見せたのちに、右側の写真が提示された。

HUMAN MINDS ARE CREATING INNOVATIONS AS THEY  
EXPERIENCE THE WORLD  
人間の心は世界を経験するときイノベーションを創る  
AND  
THESE INNOVATIONS ARE MADE THROUGH THE CAPACITY TO  
CULTIVATE  
こうしたイノベーションは文化化の能力を通じて創られる

**HUMANS BEINGS CULTIVATE!!**  
**人類は文化を作り出す**  
Cultivate = MAKE CULTURE  
耕す = 文化を創る (=文化化)

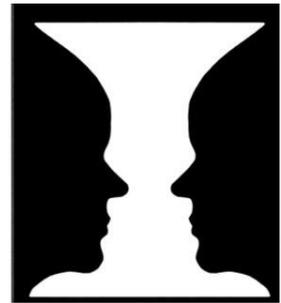


この写真を見て、皆さんは何を読み取るだろうか？

水田だ！ ということで一件落着であろう。

実は、この写真は昨年秋、ヤーンが立命館大学に来た時に茨木で撮影したものであり、私たちにとっては水田（の写真）に他ならない。しかし、ヤーンは、この写真には、Cultivated な（＝耕作された）草とそうでない草があることに注意を促した。稲はもちろん Cultivated な草である。そして、私たちはそこだけを見て、水田だ！と言っていることになる。だが、それと同時に、右下の方に草が見える。ヤーンはそれも草であること、あるいは「Cultivated されていない草」であることに注意を促した。そして、両者の草の間には、Boundary（境界域）としての畝が存在している。

私たちが水田の写真を見ると、「文化」化された領域＝稲がある領域にしか目が行かないが、この領域を図として成り立たせているのは、背景としての「自然」な領域（人によって植えられたわけではない草）があるからだということに気づかされる。この写真から自然を見いだすこともできるのである（そのとき、稲の領域は背景になる）。このダイナミックな入れ替わりはまさにデンマークの心理学者・ルビンが提唱した図地反転図形（右図）さながらである。



なお、ヴィゴツキー流の文化心理学にとって文化の対義語は自然である。そしてこの流れをくむヴァルシナーの文化心理学にとって記号という概念が最も重要な概念である。その記号について彼は以下のスライドで説明した。

## WHAT IS

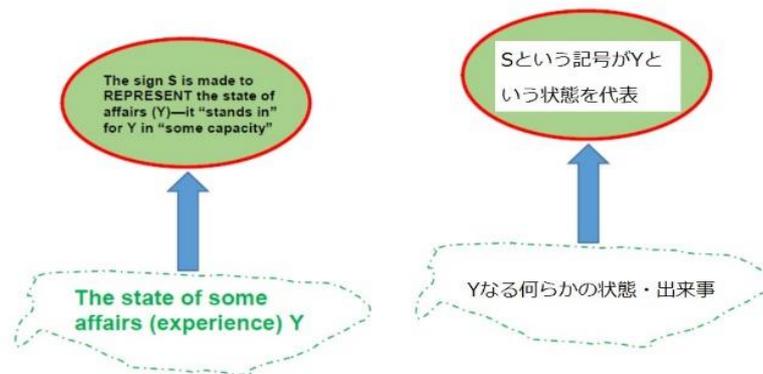
A

„SIGN“?

「記号」  
とは何  
か？

Sign as static REPRESENTATION

静的な表象・再現としての記号

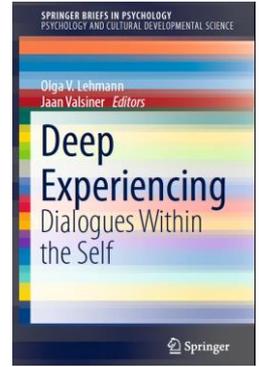


そして、学生達に、自分のスマホを机の上に置くように指示し、置きっ放しにしてどれだけ遠くへ行けるか、を想像してみるように指示した。ちなみに、学生の中には、「私は絶対1ミリも動くことができないだろうなと思いました」という感想を書いた学生もいた。このことをヤーンは、スマホが各人の記号になっているからだ、という説明を行った。

つまり、生徒各人のスマホは彼／女らを represent する一種の記号だと指摘したのである。この説明は多くの学生の理解を促した。感想の中には、「それほどスマホは私の中で大きな記号になっていたのですね」「cellphoneの問題はわかりやすかった。cellphoneだけでなく、自分の一部のような財布、カバン、子供なども記号であり、今まで不明瞭だった記号という概念が、自分の中で少しすっきりした」などと感想で書いていた学生がいた。

他にもいろいろあったが、講義の最後にヴァルシナーは、『Deep Experiencing(深い経験づけ)』という本（次ページ）を紹介した後で、学生達を鼓舞して以下のように述べた。

私は、皆さんが、数年後に、最初の研究プロジェクトにおいてこの本の著者と同じようにイノベティブな仕事を成し遂げ、あなた方のプロジェクトが2022年に「立命館ブック」として出版されることを期待している。こうした仕事は、新しい人間心理学の建設に対する日本の若い研究者からの貢献ということになるのである！



こんなことが可能なのか？と筆者は驚いたが、学生達は、「Valsiner 先生が立命館の学生が研究するのを応援していると言ってくださって、嬉しくなりました」「今まで誰も言語化できなかった deep な部分を研究してみたい」という感想を書いていたから、おそらく数年後には立命館大学の学生達による文化心理学の本が出版されていることだろう！

最後に、この日の講義を受けた学生達のコメントをいくつか紹介しておこう。

英語で講義を聞く、という機会はめったにない機会だったのですごく楽しみにしていました。Valsiner 先生はすごく文化心理学の考え方や概念をすごく私たちにもわかりやすいようにフランクに話してくださって、いつの間にか1時間たっていてすごく驚きました。また Valsiner 先生が「あなたがたが立命館の本を出版するのを楽しみにしている」というのを聞いて、私たちは基本的には座学で先人たちが研究してきた事実や心理学研究を学んできましたが、これからは座学ではなく、自分たちが進んで新しい研究を行い新たな発見をする番なのだなど漠然と思いました。

英語で話すからなのか先生が偉大なのかわからないが、とても内容に引き込まれた。所々皮肉の効いた表現があってとても面白かった。

水田の写真の例が面白かったです。私たちは当たり前のように、地面に勝手に生えてる草と田んぼの稲(草)を別のものと認識していますが、それはナチュラルなものと文化化されたものです。当たり前すぎて気にも留めないけど、自分たちが生きている世界にはナチュラルなものと文化化されたものの cultivation boarder がたくさん存在しているのかなと感じました。Valsiner 先生の授業を聞いて、普段歩いてる何気ない瞬間も、cultivation boarder を探してみたいと思えました。

以下は当日の様子である。



文化心理学の講義では感想に加え、川柳を書いてもらっている。以下のようなものが集まった。  
 ☆長文で 英語を聴きたい 話したい ☆普段より 頭を使うよ 英会話 ☆英語力もっと欲しいぞがんばるぞ  
 ☆Jaan さん deep な話題を thank U ☆大きいな 先生座ると 前見えず ☆温厚な おじさん登場 みな和む  
 ☆え、まって みんなそんなに 聞き取れる? ☆Valsiner 文化と自然で 分けられる

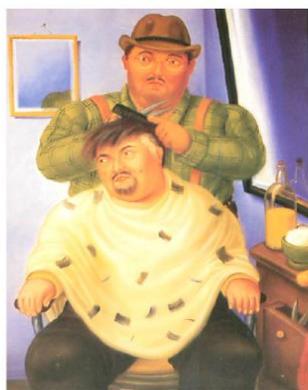
5月8日(火)

この日は、新設の人間科学研究科の大学院生を対象に講義が行われた。今回の来日においてヤーンは人間科学研究科の客員教授として招かれているのだから、いわば本業の講義である。この日の講義は「**考えることへの招待：社会と共にある human beings**」というタイトルで行われた。

この日は、散髪を例に文化的な行為について考えていった。散髪はまさに文化的な営みであるとヤーンは言う。髪が伸びてそのままにしておくのであれば、それは自然に任せるということになる。そこで、伸びっぱなしだと不便だし不潔なのでとりあえず切ろう、ということがおきる。このように髪の毛を切ることは自然状態に対する妨害ではあるが、文化とは呼びにくい。そうではなく、伸びてきたから今度は、ショートカットにしようかな、とか、前髪パツンにしようかな、というような選択肢が現れるということが文化なのだという。

**THE TOP END OF HUMAN BODY- THE HEAD COVERED BY HAIR- IS THE CONSTANT ARENA FOR CULTURE FIGHTING THE NATURE- with the help of the hairdresser**

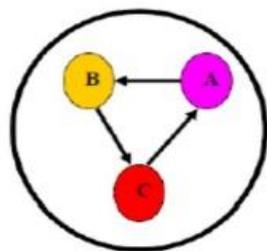
身体のとっぺん一髪で覆われた頭は文化が身体と闘うアリーナになっている。  
 床屋さんの助けを借りて



このことを、選択肢が現れる時には文化的調整子が機能しているとヤーンは表現する。

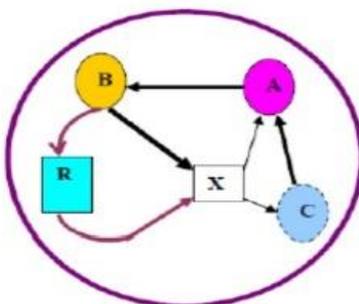
**THE HISTORY OF THIS FIGURE GOES BACK TO 2004 AND MY FIRST Ritsumeikan visit!**

この右の図(分岐点Xの文化的調整子Rが描かれているシステム)は、2004年の立命館大学のシンポジウムで初めて登場したモノで、歴史的意義がある。



A. System without a cultural Regulator (Dewey's "reflex circle")

文化的調整子Rが無いシステム (デューイの言う反射弧)



B. System with a cultural Regulator (R) of bifurcation X

分岐点Xの文化的調整子Rがあるシステム



前ページの図の左側は文化的調整子が無いシステムの状態を表したものである。髪の毛があるさまで伸びた(A)という状態になったら、切る(B)、そして伸びる(C)、そして髪の毛が切る長さまで伸びる(A)というループである。それに対し、右側には、文化的調整子「R」が出現している。ここではXという状態が新たに生まれ、切るとしたらどのように切ろうか、そのまましておこうか、などの選択肢が生まれていることがわかる。ヤーンによれば、この文化的調整子という概念は、彼が最初に日本に来た時のシンポジウムで初登場したものであり、立命館大学と文化心理学の関係を考える意味でも意義あることだと強調していた。

文化的調整子という考え方は、(筆者からすれば) 院生・学生に伝わるのか危惧されたのだが、それは杞憂であった。いくつか感想を紹介しておきたい。

人々は文化的調整子を導入することで、自分の外の対象と自身の心も文化化しているという考えはすごく納得できて面白かったです。初めて知る考えばかりで新たな知見をたくさん得ることができたので、本当に楽しかったです。

文化的調整子Rが描かれているシステムは、聴くだけなら、「ほう、そうか」という内容に思えたが、このように自らが考え実証し図で表すというすごい仕事を成し遂げたのだなと思った。

簡単なことを研究してるように思うけど、とても高次の概念などを使って研究しているのだなと感じた。分岐点xの文化的調整子Rが書かれているシステムというのが印象に残った。文化的調整子が入ることによって選択肢が増えて人間はより文化的に生活している所以なのかなとおもった。

自分の外の対象を文化化するとき、文化的調整子を導入することで人々の自身の心も文化化しているという、システムの話が面白かったです。言われてみれば、あ、本当だと理解できますが、このシステムを最初に発見することは難しいことなのだろうなと思い、すごいなと感じました。

ちなみにこの講義には、メインの受講生である修士課程の大学院生に加え、博士課程の大学院生、総合心理学部の学部生も参加して、講義+討論という形で行われた。最後に記念撮影！



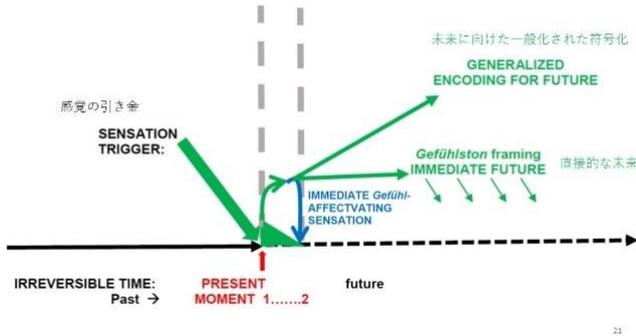
5月9日(水)

この日、ヤーンは、人間科学研究科の修士課程1回生科目「社会の中の人間科学」のゲストスピーカーとして講義を行い、その後、議論を行った。タイトルは「**Human Science in Societies 社会(複数形)の中の人間科学**」

であった。この授業は森岡正芳教授と村本邦子教授が担当しているものである。ヤーンからは「Yesterday went well (all English, Morioka led discussion). We continued in small group after, good points by students」というメールが来た。タイポ（誤字）もヤーンらしさを表しているのもので、そのままにしてある。

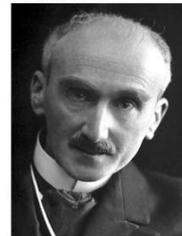
5月10日（木）

大学院修士課程1回生科目の講義（博士課程院生や学部生も参加）。また、オールボー大学に何度も行ったことがある神崎真実博士（RGIRO 専門研究員）も参加して旧交を温めた。「**FEELING INTO (*Einführung*) YOUR PHENOMENA OF INTEREST: where research begins** 興味のある現象へ感じ込んでいく：研究が始まる場所」というタイトルで行われた。



THESE TWO MEN ARE GUILTY OF GIVING US THE NEED TO SUFFER FROM ALL THE THEORETICAL AGONIES THAT THE NOTION OF IRREVERSIBLE TIME PROVIDES US  
この二人が、非可逆的時間という考えを私たちに与えたことが、私たちが理論的な苦しみを経ることになった、という意味でこの二人は有罪（ギルティ）である。

Henri Bergson (1859-1941)  
ベルクソン



Ilya Prigogine (1917-2003)  
プリゴジン



記号が感覚を通して私たちの中に入ってきたあと、非可逆的時間の中でどのような機能を果たしていくのか、ということが議論となった。

5月11日（金）

人間科学研究科（修士課程）の講義は最終日。OICのライオンにて打ち上げ！



5月12日（土）

応用人間科学研究科開設記念イベント第1弾となる公開シンポジウムを開催した。このイベントのポスターは縦型で載せにくいので文末に付録として掲載する。

イベントの開催にあたって、佐藤隆夫人間科学研究科長が歓迎の挨拶を行った。

ヤーンは「**TOWARDS NANOPSYCHOLOGY:ナノ心理学にむけて：Why Small Data are better than Big Data?なぜ小さいデータがビッグデータより良いのか?**」というタイトルで講演した。

講演のあと、TEA（複線径路等至性アプローチ）に関するシンポジウムが行われ、有志によるポスター発表会（英語）も行われた。討論の通訳は滑田明暢・静岡大学講師（博士（文学 立命館大学））が行ってくれた。

# ナノサイコロジーとは

which is the  
**INVESTIGATION OF THE MINIMUM POSSIBLE UNIQUE  
 INSTANCE FOR THE MAXIMUM GENERALIZABILITY OF  
 THE KNOWLEDGE THAT IS AVAILABLE IN THE INSTANCE**  
 (precedence- Lev Vygotsky on „minimal Gestalt“ as unit of analysis)  
 ヴィゴツキーが分析単位に「最小のゲシュタルト」を置いた  
 のになって、いつでも利用できる最大限の一般的知識のため  
 の最小限の固有の時間の調査をすることである。



5月13日(日)

1週間におよぶ講義の最終日。人間科学研究科博士課程サトゼミの院生を中心に、安田裕子総合心理学部准教授も参加してのセミナー。この1週間を振り返りながら文化心理学の理論について議論した。

この日の議論もまた多岐に及んだが、最終的に、更一般化(さら・いっぱんか: Hyper-generalization)についての考察が最も印象的なものとなった。

まず、前提として、記号が表象する内容には2つの形式があるという。1つは点的(point-like)記号で、もう1つが域的(field-like)記号である。前者は枠組的記号であり、記号が表す内容の質的均質化を図るための記号である。後者は豊穡的記号であり、記号が表す内容の質的多様化を許容する記号である。

Semiotic homogenization (schematization) and heterogenization (pleromatization)  
 記号的均質化(スキーマ化)と記号的多質化(豊穡化)

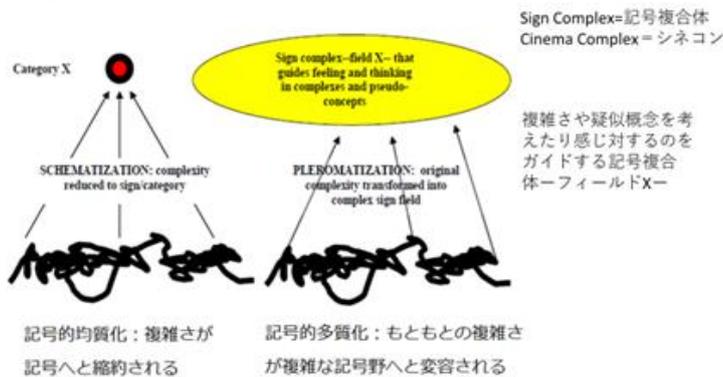
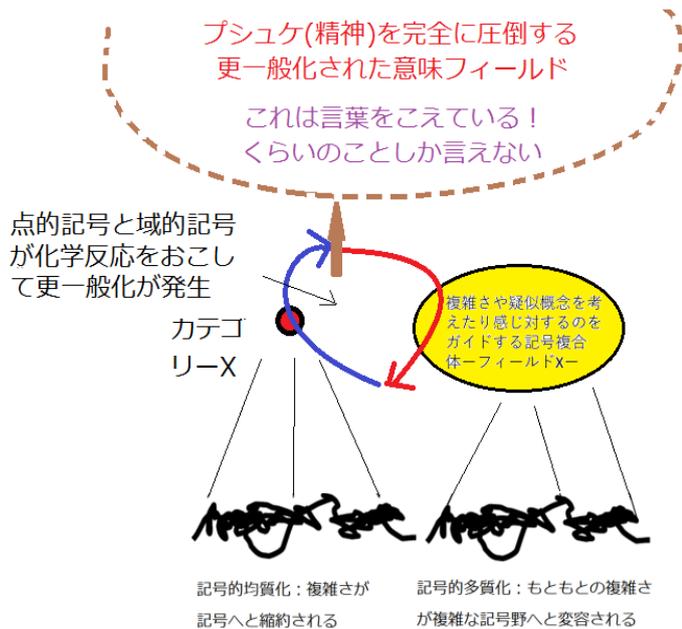


表 ヴァルシナーによる記号の2種類

名称	別名	機能
点的(point-like)記号	枠組的(schematized)記号	(質的均質化を図る)
域的(field-like)記号	豊穰的(pleromatic)記号	(質的多様化を許す)

一般に記号と言うと、私たちは点的記号のことを想像するだろう。記号が何かを表す (re-present) するものであるなら、表すものと表されるものの関係は明確になっていると考えるからである。ところが、実際には、記号には点的記号だけではなく域的記号があり、後者は意味を限定せず曖昧ではあるが豊穣さを伝える記号だといふのである。

さらに考えて見れば、私たちの生活経験は、記号で表すことができることだけで成り立っているわけではない。言葉（言葉も記号である）で表せないことも多いはずだ。こうした状況をヤーンは、点的記号と域的記号のぶつかり合いとして描くべきだとする。そしてこの両者の緊張状態 (TENSION) によって引き起こされる意味のフィールドを「更一般化 (さら・いっぱいか: Hyper-generalized) された意味フィールド」と呼ぶことにしたのである。この更一般化された意味フィールドこそが、これまでの経験をこえた経験であり、これまでの記号体系では表すことのできない経験だということになる。こうした経験を Deep Experiencing (深い経験づけ) と呼ぶ (Lehman and Valsiner, 2017)。



点的記号と域的記号について、ある言語 (たとえばラテン語) のように厳密な言語は他の言語に比べて点的記号的様相が強い、という言い方が可能になるかもしれない。また、1つの言語においても点的記号的な単語と域的記号的な単語があることは想像に難くない。よく知られていることだが、英語では Rice という一語で表すものを日本語では、稲、米、ごはん、と使い分ける。それぞれの言語において、細かい識別が必要となることについては、点的記号的な単語が増えていくのであろう。『ガーディアン』紙が報じたグラスゴー大学のプロジェクト "Historical Thesaurus of Scots" によれば、スコットランド語には 421 もの雪に関する単語があるという。

- snaw: 雪
- sneel: 雪が降り始める
- skelf: 大きな雪片

"Whiteout: new Scottish thesaurus has 421 words for snow" (by Alison Flood, the guardian, Sep. 23)

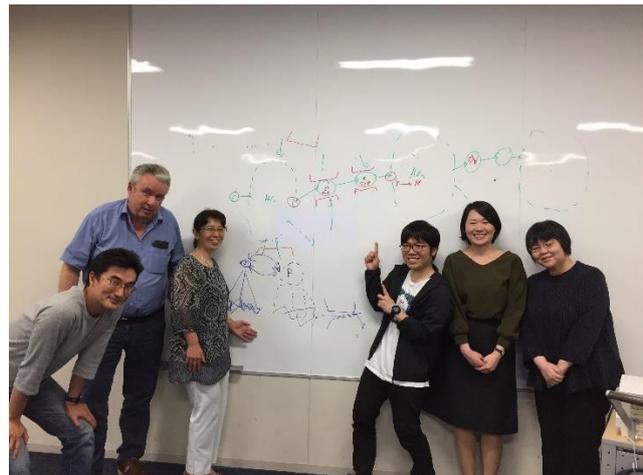
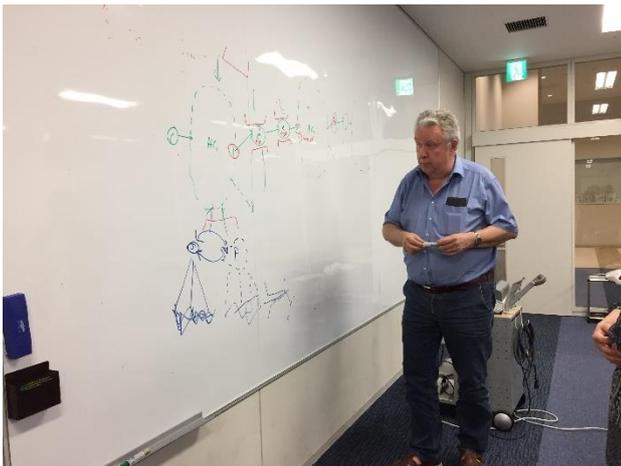
こういう例に接すると、日本語の雨の表現もたくさんあるということに思い当たる（ただし、日本語の雨に関する語は、雷雨、時雨など、複合語として成り立っているので、スコットランド語の単語の成り立ちとは少し異なる）。つまり、言葉というのはそれぞれの生活状況において必要な単語が作られるということなのであろう。そして作られた単語が使用され続けるのであれば、それはその単語が意味することが生活で重要だということになるのであろうから、言語はまさに文化そのものであるということになるかもしれない。

点的記号（的な単語）と域的記号（的な単語）によって表すことのできない経験があるとするなら、これら2つの記号に緊張が生じ、更一般化した意味フィールドが生じることになる。

言葉に表せない経験、で思い出すのは競泳・北島康介選手の言葉である。アテネ五輪(2004)の金メダル獲得において彼は「超気持ちいい！」という語を発した。これは点的記号であろう。その4年後、北京五輪(2008)で金メダルを獲得した後の彼は「何も言えない・・・」という語を発した。この発言は、肉体的にピークを越えたあとに、たゆまぬ努力で金メダルを獲得するにいたった彼の4年間の経験が一言で表せるものではない、ということを雄弁に物語っているであろう。既存の単語では表現することのできない深い経験（Deep Experience）がそこにあったと推察できるのである。

言語という記号で表現することができない経験こそが「深い経験（Deep Experience）」であり、それは点的記号と域的記号の緊張状態において創り出される「更一般化された意味フィールド（Hyper-generalized meaning field）」である。

以下の写真は、点的記号と域的記号の緊張状態と TEA（複線径路等至性アプローチ）を架橋する議論を行っている時の様子である。知識生産の現場を捉えた貴重なショット、かもしれない（笑）。



そして、討論終了後、最後の最後に、JR 茨木駅周辺でフェアウェルパーティー。人間科学研究科博士課程院生と文学研究科博士課程院生がヤーンの帰国の名残を惜しんだ。



## まとめ

思い起こせば、ヤーンが初来日したのは2004年である。その時にもヤーンの授業を行い、そこでも私が通訳を務めたのだが、そのときの理解度とは、当然ながら雲泥の差があったと感じられた（自己満足？）。

実際、ヤーンは初来日後、多くの日本人心理学者に、英語で論文や本を書くことを薦め、この15年間における日本の文化心理学や質的研究における英語による情報発信力は飛躍的に向上した。また、多くの日本人研究者（特に若手）がクラーク大学（アメリカ）やオールボー大学（デンマーク）で学ぶ機会も格段に増えた。

また、海外研究者と日本の研究者のネットワーク作りにも尽力してもらった。サトゼミ背番号隊（大学院生）の多くがその恩恵を受けているし、筆者自身も例外ではない。筆者が英語の編著、単著、それぞれ1冊を刊行できたのは、まさにヤーンとの縁があったからに他ならない。

日本ならびに立命館大学の研究者の力量を向上させてくれたのみならず、それを「正しく」理解してもらう機会も、まさにヤーンによって与えられたと言えるであろう。この15年間に感謝すると共に次の15年間に構想していきたい。

## 文献

Lehmann, Olga V. and Valsiner, Jaan (Eds.) 2017 Deep Experiencing : Dialogues Within the Self. Springer.

付録： 人間科学研究科開設記念イベント第1弾 ポスター

立命館大学大学院人間科学研究科開設記念イベント第1弾

参加無料  
(要参加申込)

第8回総合心理学セミナー  
Valsiner先生立命館大学客員教授就任記念

2018年5月12日(土)  
立命館大学 大阪いばらきキャンパス B棟



Jaan Valsiner先生

**タイムスケジュール**

13:00 - 公開シンポジウム B棟3F コロキウム

13:00 - 13:45 基調講演  
Jaan Valsiner  
**TOWARDS NANOPSYCHOLOGY**  
: Why Small Data are better than Big Data?  
\*30分程度の英語講演+日本語解説

14:00 - 16:00 シンポジウム  
**TEA (複線径路等至性アプローチ) : 15年間のひろがり**  
\*1人20分 日本語

パネリスト1 サトウタツヤ (総合心理学部) TEAの発祥と展開  
パネリスト2 伊東美智子 (人間科学研究科大学院生/神戸常盤大学)  
看護領域におけるTEA活用  
パネリスト3 北出慶子 (文学部) 応用言語領域におけるTEA活用  
パネリスト4 安田裕子 (総合心理学部) 臨床心理におけるTEA活用  
指定討論 Jaan Valsiner (オールボー大学/立命館大学)

16:30 - ポスター発表会 B棟5F 産学交流ラウンジ (クロノトポス)  
18:00 - 懇親会

参加申込: Googleフォームより参加申し込みをお願いします (右QRコードまたは <https://goo.gl/forms/2j2D51WA2A4LW8q83>)。  
締め切り: 4月30日(月)  
お問い合わせ: teasy2018@gmail.com



主催: 立命館大学大学院人間科学研究科/総合心理学部  
協力: 立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 第3期拠点形成型R-GIRO研究プログラム「学際的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成」(代表・矢藤優子)/文部科学省私立大学研究ブランディング事業/立命館大学人間科学研究科  
後援: 日本質的心理学会

